

道元禪師の大慧禪師批判について

陸川堆雲

道元禪師には、代表作ともいべき有名な正法眼蔵九十五巻がある。その中に「説心説性」と「自証三昧」という二章がある。何れも大慧禪師に対する非難攻撃であるが、特に「自証三昧」には、痛烈なる言語を用いた非難攻撃が記されている。それがため世上にてはこれを根拠として、大慧の宗風を継承せる我国の臨済禪に対する、非難攻撃の有力なる一因となっている。そしてこれが曹洞禪と臨済禪の本質的相違であるかの如くに誤認せられ、更にこれが感情問題にまで発展し、時には表面上は兎も角、腹の中では両宗対立觀念となっている実情である。果して道元禪師の大慧非難は、当を得たものであるや否やは、大いに検討を加える必要があると考える。先ずこれについての一方法として、無着道忠和尚の著なる「永平正法眼蔵僭評」を借りることとする。この著は

道忠和尚が、正法眼蔵に対する反駁論が記されているものである。無着道忠和尚については、今さらいうまでもないが、当時京都禅界の代表者ともいべき宗匠で、しかも博覧強記の篤学長者として、一世の信頼を受けた人で、九十二歳の長寿者であった。その著書は三七四種、九一一巻（禅文化研究所刊無着道忠和尚撰述目録）といわれているが、その中に「永平正法眼蔵拈録」という一巻があり、別称を「永平正法眼蔵僭評」といつている。この著は和尚の七十四歳頃書かれたものらしい。

この僭評を見ると、温健なる道忠和尚とも思えぬような罵言を、道元禪師に浴びせかけている。かかる語調より見れば、道忠和尚は相当腹を立てて、この僭評を書かれていることは明らかであるが、それは一面道元禪師の所言を、そのまましておくことは、臨済宗の権威にか

かるものとして、自宗を擁護せんとする、護法精神より出でたるとも考えられるが、それよりも道元禪師の事実誤認を論駁せんとする公憤的正論の立場からであるというが正しいと考える。然しこの激語のために、曹洞宗側の感情を刺激し、互に喧嘩腰のようになってゐる。それで無着和尚は、曹洞宗側の評判は頗る悪い。かかる情勢よりして、今日に於ても本質的研究討議は疎外され、この問題に関する限り両宗は、喧嘩別れの形になつてゐる。

前記の通り無着道忠和尚の僭評なるものは、道元禪師の正法眼蔵中の各章に対する駁論集である。若干の例を挙げれば次の通りである。

一、永平ハ達磨宗ノ見性ヲ知ラズ。(説心説性章)
 二、永平ハ実ニ可憐憫者ナリ。徒ラニ口ニ妄心即仏ノ道理ヲ説得ルヲ至極ト思ヘリ。大慧ノ悟得ノ境界ヲバ夢ニモ知ラズ。(同上)

三、永平好ミテ他家ニ於テ強テ疵ヲ求ム。(仏経章)
 四、永平ノ眼前ニハ禅宗ノ正伝ハ、タダ洞山ト思ヘリ。

(自証三昧章)

五、永平美語ヲ削テ私ニ貶語ヲ加フ。(同上)

六、永平自ラナキ事ヲ偽造シテ、偽造事迹ノ上ニ口吧々地ニ過失ヲ云ヒカケタリ。(同上)

などであるが、これは道元禪師の言説の過激なるに、對抗したものである。それ故に道忠和尚の態度を、是非せんとする場合には、先ず道元禪師の態度を検討せねばならない。道忠和尚の僭評も万全とはいわれぬが、自証三昧の章に関する限り、僭評の方が正鵠を得ていると思う。それで道元禪師の問題の所言を左に抄録してみる。

一、大宋国紹興のなかに、徑山の大慧禪師宗杲といふあり。もとはこれ経論の学生なり。游方のちなみに、宣州の理禪師にしたがいて、雲門の拈古、および雪竇の頌古拈古を挙す。参学のはじめなり。雲門の風を会せずして、つゝに洞山微和尚に参学すといへども、微つゝに堂奥をゆるさず。微和尚は芙蓉和尚の法子なり。いたづらなる席末人に斉肩すべからず。杲禪師ややさしく参学すといへども、微の皮肉骨髓を摸着することあたはず。いはんや塵中の眼睛ありとだにもしらず。あるとき仏祖の道に臂香嗣書の法ありとばかりきて、しきりに嗣書を微和尚に請す。しかあれども、微和尚ゆるさず、つゝにいはく、なんじ嗣法を要せば倉卒なることなかれ、(以下漢文和訳)直に須らく功夫勤学すべし。仏祖受授は妄りに付授せざるなり。吾れ付授を惜しむにはあらず、只だ是れ爾ち未だ眼を具せざる在り。ときに宗杲いはく、本具正眼、自証自悟、

豈に付授せざるに有らんや。微和尚笑つて而して休す。のちに湛堂に參ず。湛堂一日宗杲に問ふて云く、
 爾ち鼻孔什麼に因て今日半辺無き、杲云く宝峯門下。
 湛堂云く杜撰の禪和。杲看經する次で、湛堂問ふ、什麼の經を見る。杲云く金剛經。湛堂云く、是法平等無有高下、什麼としてか雲居山は高く宝峰山は低き。杲云く、是法平等無有高下。湛堂云く爾ち箇の座主奴と作り得たり。又一日湛堂十王を粧ふ処を見て、杲上座に問ふて云く、此の官人姓は何ぞ。杲云く姓は梁。湛堂手を以て自ら頭を摸して云く、争奈かせん姓は梁、祇だ箇の幘頭を欠くことを。杲云く、幘頭無しと雖も鼻孔髣髴たり。湛堂云く杜撰の禪和。湛堂一日宗杲に問ふて云く、杲上座我が這裡の禪、爾ち一時に理會し得たり、爾ちをして説かしむるも也た説き得たり、爾ちをして參得せしむるも也た得たり、爾ちをして頌古、拈古、小參、普説、請益を做さしむるも爾ち也た做し得、祇だ是れ爾ち一件の事未在なることあり、爾ち還つて知るや否や。杲云く甚麼事か未在なる。湛堂云く爾ち祇だ這の一解を欠くことあり、因と。若し爾ち這の一解を得ずんば、我が方丈に爾と説く時は便ち禪有り、爾ち纔かに方丈を出づれば便ち無し。惺惺思量の時は便ち有り。纔かに睡着すれば便ち

無し。若し此の如くならば、如何んが生死に敵することを得んや。杲云く正に是れ宗杲が疑處なり。後に稍や載(とし)を経て湛堂疾を示す。宗杲問ふて云く、和尚百年の後、宗杲阿誰にか依付して以て此の大事了す可き。湛堂囑して云く、箇の勤巴子有り、我れ亦た他を識らず、然りと雖も爾ち若し他に見へば、必ず能く此の事を成就せん、爾ち若し他に見へたらば、更に他遊す可らず、後世出で来て參禅せよ(以上漢文)。この一段の因縁を檢点するに、湛堂なほ宗杲をゆるさず、たびたび開發を擬すといへども、ついに欠一件事なり、補一件事あらず、脱落一件事せず、微和尚そのかみ嗣書をゆるさず、なんぢいまだしきことありと勸励する微和尚の、觀機あきらかなることを信仰すべし。正に是れ宗杲疑處を參究せず、脱落せず、打破せず、大疑せず、被疑礙なし。そのかみみだりに嗣書を請する、參学の倉卒なり、無道心のいたりなり、無稽古のはなはだしきなり、無遠慮なりといふべし、道機ならずといふべし、疎学のいたりなり、貪名愛利によりて仏祖の堂奥をおかさんとす、あはれむべし仏祖の語句をしらざることを。稽古はこれ自証と合せ、万代を涉獵するは自悟ときかず、学せざるによりて、かくの如く不是なり。かくの如く自錯あり。か

くのごとくなるによりて、宗杲禪師門下に、一箇半箇の真巴鼻あらず、おほくこれ仮定なり。仏法を会せざるは、かくのごとくなり。而今の雲水かならず審細の参学すべし。疎慢なることなかれ。

宗杲湛堂の囑に因て湛堂順寂の後、円悟禪師に京師の天寧に参す。円一日陞坐、宗杲神悟有り。悟を以て円悟に先呈す。悟云く未だしと。子ち此の如くなりと雖も、大法故と未だ明らめず。又一日円悟上堂して五祖演和尚の有句無句の語を挙す。宗杲聞て言下に大安楽の法を得。又解を円悟に呈す。円悟笑て云く、吾れ汝を欺かざらんやと。

これ宗杲禪師、のちに円悟に参する因縁なり。円悟の会にして書記に充つ。しかあれども、前後いまだあらたなる得処みえず、みづから普説陞座のときも、得処を挙げず、しるべし記録者は神悟せるといひ、得大安楽法と記せりといへども、させることなきなり。おもくおもふことなかれ、ただ参学の生なり。

円悟禪師は古仏なり。十方中の至尊なり。黄檗よりのちは、円悟のごとくなる尊宿いまだあらざるなり。他界にもまれなるべき古仏なり。しかあれども、これをしれる人生まれなり。あはれむべき娑婆国土なり。いま円悟古仏の説法を挙して、宗杲上座を檢点するに、

師におよべる智、いまだあらず。師に齊しき智いまだあらず、いかにいはんや師よりもすぐれたる智、ゆめにもいまだみざるがごとし。しかあればしるべし、宗杲禪師は、滅帝半徳の才におよばざるなり。ただわずかに華嚴、楞嚴等の文句を暗誦して、伝説するのみなり。いまだ仏祖の骨髓あらず、宗杲おもはくは、大小の隠倫わずかに依草附木の精靈にひかれて、保任せるところの見解これを仏法とおもへり。これを仏法と計せるをもて、はかりしりぬ仏祖の大道いまだ参究せずといふことを、円悟よりさらに他遊せず、智識をとぶらはず、みだりに大刹の主として、雲水の参頭なり。

のこれる語句、いまだ大法のほとりにおよばず。しかあるを、しらざるもがら、おもはくは、宗杲禪師むかしにも、はぢざるとおもふ。みしれるものは、あきらめざると決定せり。いたづらに口吧々地のみなり、しかあればしりぬ、洞山の微和尚まことに後鑑あきらかに、あやまらざりけりといふことを。宗杲禪師に参学せるもがらは、それすゑまでも微和尚をそねみ、ねたむこと、いまにたえざるなり。微和尚はただゆるさざるのみなり。準和尚のゆるさざることは、微よりはなはだし。まみゆることには勘過するのみなり。しかあれども準和尚をねたまず、而今およびこしかた

の、ねたむともがら、いくばくの憊懼なりとかせん。

おほよそ大宋國に仏祖の児孫と自称するおほかれども、まこと学せる、すくなきゆゑに、まことをおしふるすくなし。そのむねこの因縁にても、はかりしりぬべし。紹興のころすら、なほかくのごとし。いまはそのころよりもとれり。たとふるにもおよばず。いまは仏祖の大道なにとあるしとだにも、しらざるともがら、雲水の主人となれり。しるべし仏祖、西天東土、嗣書正伝は、青原山下これ正伝なり。青原山下よりのち、洞山おのづから正伝せり。自余の十方かつてしらざるところなり。しるものはみなこれ洞山の児孫なり。雲水に声名をほとこす宗杲禪師なほ生前に自性自悟の言句をしらず、いはんや自余の公案を参徹せんや。いはんや宗杲禪老よりも晚進のもの、たれか自証の言をしらん。しかあれば、すなはち仏祖道の道自道他、かならず仏祖の身心あり、仏祖の眼睛あり。仏祖の骨髓なるがゆゑに、庸者の得皮にあらず。

以上が道元禪師の自証三昧の章に記された本文である。これを要約すると次のようである。

- 一、大慧は始め宣州の理禪師に参じ、後に洞山の微和尚に参じたが、契悟は出来なかつた。
- 二、次に湛堂準和尚に参じ、問答往来いろいろあつた

が、遂に許されなかつた。

三、そのうちに湛堂は重病に罹つたので、その指示に従つて円悟禪師に参じた。そこで自らは神悟せりとか、大安樂を得たりなどと言っているが、實際はそのようなあとは見えない。

四、要するに大慧は、疑処を参究せず、心身脱落せず、大疑もせず、打破するところもない。それなのに洞山微に対して嗣書を要求したりするなどは、無遠慮なる者、参学倉卒無稽の甚だしき者、無道心の至りなる者である。又道機もなく、疎学で、貪名愛利により仏祖の堂奥を犯さんとする憐れむべき者である。これは参学不足の来たすところである。それで大慧門下には、一人も半人も眞の禪者はいない。

五、円悟禪師は古仏といつてよく、十方中の至尊で、黄檗以後その右に出るものはない。この円悟に対し、大慧などは師に半徳を減ずという程にもゆかぬ者で、ただ僅かに華嚴や楞嚴の文句を、暗誦して伝説するのみで、仏祖の骨髓などあつたものでなく、依草附木の精靈にひかれて、これを仏法と思うので、大道の辺際にも近づつておらぬ者である。

六、大慧は円悟の許に行つたけれど、その後他遊して、他の知識を訪わず、直に大寺に住し、雲水の指導をし

ているので、大法などとは程遠いもので、徒らに口舌を弄するに過ぎない。然るにこれらを知らざる参徒等は、大慧の会下となりて、洞山微和尚を嫉みて悪口をしている。洞山微和尚はただ許さなかつたのであるが、湛堂和尚の方は、洞山微和尚よりも一層大慧を認めなかつたのである。然るに洞山微和尚に対しては、そねみ嫉むことの深いのは、どうしたことか、わからない話だ。

道元禪師の言は以上の如くで、大慧を全く認めぬのみか、罵言を以て口を極めて貶斥しているのである。これを読めば無着道忠和尚ならずとも腹を立てて、道元禪師に対し喧嘩腰にならざるを得ないのは当然である。然して最も甚だしきことは、道元禪師は事実を誤認しているのみならず、更に事実を曲げ或は無実のことを捏造して、大慧攻撃をしているのである。これは何としても理解に苦しまざるを得ない。これについては後に再論するが、無着道忠和尚は僭評に於て次の論駁をしている。これを摘記して批判の資料とする。

一、永平は自証三昧の章で、正嫡の禪宗なるものは、青原下に限るとしている。それで洞山下のもののみが、正しい禪であるという。然るに円悟は古仏で、十方中の至尊である、黄檗以後円悟の如きはないと、賞讃し

ている。又阿羅漢の章でも、円悟は正伝の的嗣なる仏祖なりと言つて、自家撞着のことを述べている。

二、永平云く、大慧宗杲は本とは経論の学生であるのに、洞山微和尚に嗣書を要求したというが、大慧はこの時は未だ廿歳であつた。洞山微が許可しなかつたのは事実であるが、嗣書など要求した事実はない。かかる捏造の記述を何故にするのか。妄語を構へて自家の立場を擁護せんとするのは、誠に笑うべきである。

三、永平は大慧が湛堂に参じて、許可のなかつたことを挙げて攻撃しているが、これは大慧未悟の時代であるから、湛堂の許可のなかつたことは当然であり、大慧に於ても何等攻撃を受くる筋合ではない。未悟の時代は誰れに於ても、同じであるのではないか。それ故に大慧は後に円悟に参じたのではないか。

四、永平は大慧につき、参究せず、脱落せず、打破せず、大疑せず、倉卒、無道心、無稽古、無遠慮、無道機、疎学、貪名愛利、仏祖の語句を知らずなど、いろいろの悪口を並らべ、又事迹を捏造して攻撃しているが、大慧は斯かる誹謗を受くる筋合はない。又永平は斯かる大慧なれば、門下には真の禪者は一人も半人もないなどと、攻撃しているが、統伝灯録を見れば、その嗣は六十四人記されているではないか。

五、永平は円悟を古仏なりと称讃しているが、その円悟が大慧を特に証明して法嗣としていないか。即ち円悟は法語の中に於て、ただ門人としての大慧を喜ぶのではない。大慧は正法眼蔵の透得底の者であるから、それを喜ぶのであると言っているではないか。大慧の器量は拔群であつて、永平がねたみ誇るが如き人物とは大違いであるぞ。

六、永平は大慧が円悟に随侍した以後は、他へ遊歴参問せぬと非難しているが、円悟の許であれだけに大事了畢したのであるから、更に師を求めて、歴遊する必要がなぜあるというのか。そのような道理がどこにあるか。

七、大慧は大法を明らめず、口吧地地の者だから、それで洞山微和尚は許さぬと判断したことは、後日に至つても誤りではなかつたと永平は言うが、これは大慧未悟の時であるから、何等大慧の病とすることはない。こんなことすら永平の徒輩には解せないとは、隣れむべきだとの語勢で、道忠和尚は書いている。

八、永平は大慧が、湛堂和尚にあればど厳しくやられたが、湛堂和尚に対しては、それ程のことではないのに、洞山微和尚はただ大慧を許さぬと言っただけであるのに係わらず、微和尚を嫉むこと甚だしいのは、訳の解

らぬことだと言っている。然し大慧はそのように、微和尚を嫉んだことはどこにも見当らない。これは永平が事実を偽造して、大慧攻撃をしているのである。永平は他に含むところのあつてのことに相違ない。

以上が無着道忠和尚の僭評に於ける論駁の概要である。いま自証三昧の章に局限して道元無着の両者の所説を対判すると、僭評の所説には合理性があり肯察に當つてゐるが、これに反し道元禪師の見解は、訳の解らぬ頗る的外ずれのものである。これを証するため、僭評の言い足らぬ処を補説し、道元禪師の謬見を更に追究して、徹底的にこれを論駁することにする。

元來道元禪師の大慧攻撃は、何を資料としているかである。自証三昧の文意から察すれば、大慧年譜を資料としたものと推せられる。それは年譜と殆ど同一の文を引用されているからである。道元禪師は道忠和尚の言う如く、大慧年譜を悪用している。そのみならず、捏造をも加えているのである。これを証するため大慧年譜の必要と思はるる処を左に摘抄する。

七歳。哲宗、紹聖二年（西曆一〇九五）

氣宇神の如し。……僧其の家に至れば、父の側に侍し、客去らば其の談論を記し、片言も遺さず云々。

十歳。哲宗、元符元年（二〇九八）

華嚴經の入法界品を読み、覺へず失笑す。

十六歳

出家。名を宗杲といふ。

十九歳

瑞竹理和尚に依る。理曰く汝は雲峯悦和尚の再来なりと称す。

二十歳

洞山微和尚に約二年間参じ、曹洞の宗風を一時に参得した。然し其の宗旨には意に契はぬものがあつた。

二十一歳。徽宗、大觀三年（一一〇九）

舒州に行き海会従禪師に依る。海は羅漢南公の嗣である。

二十四歳。同、政和二年（一一二二）

湛堂に参ず。

二十五歳。同、同三年（一一二三）

湛堂曰く、此の子他日必ず能く重きに任じ、遠きを致さんと。

二十六歳。同、同三年（一一二四）

湛堂問ふて曰く、杲上座我が道裡の禪備ち一時に理會し得たり。備ちをして説かしむるも也た説き得たり。備ちをして拈古、頌古、普説、小參を做さしむるも備ち也た做し得たり。只だ一件の事ありて不是なり。備

ち是を知るか。対へて曰く某甲知らず。湛堂曰く因。備ち這の一解を欠くこと在り。

二十七歳。同、同四年（一一二五）

是の年夏湛堂病に罹る。大慧曰く、和尚の疾起たざれば、某甲をして誰にか依附せしめて、以て大事を了すべき。湛堂良久して曰く、箇の川勤（円悟）有り。我れ亦た他を識らず。備ち若し他に見へば、必ずよく此の事を成就せんと。

湛堂遷化す。

二十八歳。同、同六年（一一二六）

兜率照禪師の書を得て紹介となし、丞相張無覺（無尽居士）に湛堂の塔銘を求む。

無尽門庭高くして、天下許可すること少れなり。師（大慧）を見て一言にして契し、榻を下て朝夕与もに語る。号を妙喜、字を曇晦と改む。

二十九歳。同、同七年（一一二七）

大寧和尚の語録の序を洪覺範に求む。

三十歳。同、重和元年（一一二八）

潜庵源禪師に予章の章江に参じ、之を久うす。

三十一歳。同、同二年（一一二九）

兜率照禪師に依る。又黄龍草堂和尚を訪ひ、又靈源和尚と語て倦まず。靈源語つて曰く、宣州の杲兄（大慧）

見地明白、語を出すこと超邁、乃ち我が家の千里の駒のみと。又洪覚範を訪ふ。

三十二歳。同、宣和二年（一一二〇）

春、再び無尽居士を荊渚に訪ふ。問答往来あり。無尽師に嘱して曰く、子ち必ず円悟に見へよ。子の行を助けん。

十一月無尽歿す。（一般には宣和四年とされている）

三十三歳。同、同三年（一一二一）

天寧に登る。華嚴、宝積の二経を見る。

三十四歳。同、同四年（一一二二）

円悟和尚蔣山に居す。大慧竟ひに行かんと欲す、同志之をすすめて曰く、円悟は必ず闕に来らんと。

三十五歳。同、同五年（一一二三）

太宰菴に居す。闕府敬事す。太宰は師と談論することを喜ぶ。乃ち府第の後の花園を以て菴に易へ、師を遷して之に居らしむ。

三十六歳。同、同六年（一一二四）

九月円悟天寧に住するの詔あり。大慧之を聞いて私かに自ら慶して曰く、此の老は実上天が我に賜ふものなりと。預じめ天寧に至て円悟の来るを待たんとす。太宰菴のもの篤く大慧を留めんとす。大慧密かに遁れて天寧に行く。乃ち自ら曰く、若し円悟の禅他方と異る

こと無く自分を許可せば、無禅論を著はさんと。清凉華嚴の疏鈔一部を持して天寧に至る。

三十七歳。同、宣和七年（一一二五）

大慧四月天寧に抵たる。円悟陞座、如何なるか是れ諸仏出身の処、薰風自南来、殿閣生微凉と。這裏に向つて忽然として前後際断す。然りと雖も動相生せず、却て浄俣の処に坐在す。入室の次で円悟曰く也た易すからず、爾ち這箇の田地に到り得て惜しむべし死して活することを得ざることを、語句を疑はざる是を大病と為す、道ふことを見ずや懸崖に手を撒して自肯承当す、絶後再び蘇て君を欺くこと得ず、須らく信ずべし這箇の道理あることをと。大慧不整務侍者となり、扱木堂に居し、毎日士大夫と同じく入室。只だ有句無句…の語を挙す。僅かに口を開けば便ち道ふ不是と。一日趙表之と同じく菓石の次で、筋を把つて手に在り、食を喫することを忘らす。円悟師を顧みて表之に語て曰く、這の漢黄楊木の禅に参得すと。居……ること幾ばくもなくして円悟を叩いて曰く、聞くと和尚嘗て五祖に此の話を問ふと、知らず其の答を記すや否や。円悟笑ふのみ。師曰く若し人天衆前に対して問はば、今豈に知る者無からんやと。円悟乃ち曰く、向きに問ふ有句無句は藤の樹に倚るが如き時如何。祖曰く

描すれども描き成さず画けども也た画き就さず。又問ふ忽ち樹倒れ藤枯るるに遇はん時如何。祖曰く相随来也と。師拳を聞いて乃ち声を抗げて曰く、某会せり。円悟曰く只だ恐らくは爾ち公案を透ることを得ざることをと。云く請ふ和尚拳せよ。円悟遂に拳す。師語を出すこと滞ることなし。円悟曰く今日方さに知る吾れ汝を欺かざることをと。遂に臨済正宗記を著はして以て之を付し、記室を掌らしめ、座を分つて徒に訓ゆ。師乃ち香を炷き誓を為して曰く、寧ろ此の身を以て衆に代つて地獄の苦を受くとも、仏法を以て人情に当てずと。乃ち竹篋を握り、応機の器と為す。是に於て声譽藹著、叢林咸く之に帰重す。円悟は師に示す法語の後に跋して云く、

泉首座昔し叢林に遊び、徧ねく大有道の士に見ゆ。軒昂騰踏羈摩すべからず、曾て渚宮に於て無尽居士と投契す。公雅とより其の器を重んず、毎ねに囑して曰く、応さに須らく仏果に見ゆべしと。宣和中会たま余、旨を被つて天寧を領す、渠れ即ち先んずること一日。入堂已つて而して室中に造たる。語を発するに果して異なり、嘗て陞座諸仏出身の処、薰風自南来を挙す。即ち大いに瞥然たり。爾してより方丈の側に命じて寅夕之を鍛鍊す。白雲老師の昔示す所の有句無句を

以てす。渠れ伎倆を尽くして百種展開す。悉く列下幾んど以為心倅移換。初め実地無し、志誠に因て之を語る。昔し仏鑑余と正に是の謗を興こす。更に意を絶して頤きを探ぐる、当さに多きに較べざるべし。後來驚然として猛省して、尽とく機籌知見玄妙を脱去す。因に渠れが為めに曰く、正に好し禅に參ずるにと。即ち踴躍向前、従頭一一に針錐を加ふ。始めて浩然として大徹す。予人を得ることを喜ばず、但だ此の正法眼蔵覩得透底有ることを喜ぶ。以て臨済の正宗を起すべし。遂に稠人の中に於て座を分ちて徒に訓へしむ。之を久ふして都下に会する多し、故に瓶錫を理して沐を出ず。分れに臨んで此を書して以て別と作す。年余を問てて平江の虎丘より得々として欧阜に上る。再び集めて山に至るの次の日、首座寮に入る。闔山數百の衲子聳動す。屢ば師子吼をなし、室中金圈栗蓬の大鉗鎚を掲示す。本色久參の流ひ、欽服せずと云ふこと靡し。而て徳性愈よ恬として穩洪、無諍の風、恬恬として勝負に較たらず、只だ深く山谷に藏くれ、古老の火種刀耕に倣ひ、鋤頭辺に向て攻苦食淡の兄弟を收拾せんと欲し、草衣茅舎世を避け時の晴平を待つ。即ち悲願を發し、真の大夫慷慨の英靈奇傑の人、跼歩する所、因みに再び細書となし仍て是の跋を作る。又師を

送る持鉢の頰の後に書す。

杲公妙喜宣和の末、誠を天寧の密室に投ずること四十二朝昏。而して一言の下に於て領略す。尋いで盂を掌にして廓中に入る。意を発すること甚だ鋭し。行に臨んで偈を作て以て之を餞す。惟だ一期の小縁を以ての要ならず、万人の志を結ばんと欲す。此の千二百斤の担子を洪荷し、既に已に能事を了す。即ち記室に入り、椎払の下に徒に訓ゆ。四方の雲衲駢臻して遽かに舍人の盟に渝ゆるに遭ふ。彼彼として衣を払って汗を出づ。相分れて歳華聿に雲居に居す。首衆即ち旧語を持して之を書せしむ。

此の二跋を按ずるに、師は乃ち是の四月初一日挂塔。円悟初二日入院。五月十三日悟道。四月初一日より五月十三日に至て、乃ち四十二。悟道の後、持鉢化縁し畢て、書記寮に入ること明らけし矣。

三十八歳。欽宗、靖康元年（一一二六）

天寧の記室に居す。分座徒に訓ゆ。

円悟師を挙す立僧上堂を按ずるに曰く、鶻兒未だ窠を出でざるに已でに摩膏の志有り、虎子未だ乳を絶たざるに已でに牛を食ふの氣有り。況や羽翼成るをや。況や復た爪牙備はるをや。奮迅すれば即ち群を驚かし、八面清風起る。一条の脊梁骨硬きこと鉄に似たり。白

棒天地を掀かぐ、相ひ与もに法幢を建て、衲僧の巴鼻を展ぶ。

以下年譜を必要とせぬので省略する。

この年譜によれば、道元禪師の大慧攻撃は大慧の廿歳より廿七歳までの間を攻撃材料に使用しているのである。この間に洞山微和尚のことも、湛堂和尚のこともあるのである。而してそれ以後の材料には、殆ど触れていないことは、全く不思議であり、不可解である。然して大慧は湛堂を去って直に円悟に参じたように記されているが、大慧は湛堂を去ってより諸処を歴遊し、約十年を経過した後、三十七歳に至って、始めて円悟に謁したのである。そして円悟の鉗鎚により大成を見たのである。若し道元禪師が大慧攻撃をするなら、大慧大成以後なる三十七歳を基点として、その後の資料によるでなければ、攻撃の意味をなさない。道元禪師はこの意味のないところに対して力説懸命である。それであるから道元禪師の大慧攻撃は的外ずれであるといふのである。昔し雪峯和尚が三度び投子に登り、九度び洞山に到つて相契せず、遂に徳山の室に入り始めて箇事を了したと聞く。世に雪峯の三登九到を以て、雪峯未悟の非を誰れか攻撃するであろうか。否なこれを禅林の佳話、芳躅として讃仰しているのである。然るに道元禪師が大慧の雪峯のこの

時代に比すべき、洞山微及び湛堂時代を以て、攻撃しているのは、道元禪師の禅眼いづくにあるやという外はない。

更に道元禪師は、円悟禪師を古仏として称讃するが、その円悟が三十七歳の時の大慧を大いに許可し、臨濟正宗記を作つて大慧に附嘱していることに對し、何故に眼を覆うのであるか、又はこれを看過しているのか、道元禪師の心境を疑わずにはいられない。若し道元禪師が勘違いをしているなら、勘違いも甚だしきもので、ために天下の禅思想を混乱させた罪は償うべくもない。又大慧を非とし、円悟を是とすることは、勘違いとは異なるもので、理論の矛盾である。

又大慧武庫上巻を見ると、大慧が宣州の理禪師に参じ、後に洞山微和尚及び湛堂に参じたことは、年譜そのままの転用と思わるるのであるが、道元禪師の所見とは反對に、寧ろ大慧の逸事として記されている。大慧武庫の性質上、大慧非難に資すことを載せる筈はない。これを非難するのは道元禪師の偏見なる一証としてよい。

抑も道元禪師のライフワークとしての著述に正法眼蔵という題名を附している。道元流行の今日の我が国にて、正法眼蔵といえは直ちに道元禪師と思わるる程になつてゐる。然るにこの正法眼蔵という書名は、禪師が最

も厭いの攻撃相手である大慧の著書の書名である。大慧の正法眼蔵は、三卷三冊及び、三卷六冊の宋版本があり、同六冊本は我が国にても寛永年間に刊行されており、又正統蔵中にも収められている古来よりの有名な本にて、従前は正法眼蔵といえは、大慧のものとして定まっていたものである。それを道元禪師が大慧の後塵を拝して、自己のライフワークの題名にしたことは、どんなものであろうか。道元禪師は靈山会上拈華微笑の語に因んで、附けた書名であらうが、大慧もまた同様であつたに相違ない。書名は何と題するとも著者の勝手であるが、かかる同名異書は誠に紛らわしい。世に同名異人があつて、世人に迷惑をかけていることは周知のことであるが、何とか外に題名も考えられそうなものである。これは本質的のことではないが、皮肉のことではないかと思はるのである。

惟うに自証三昧の章は、或は後人の偽作ではないかとも、思い直してみる必要がある。道元禪師ほどの人が、斯かる罵言で大慧攻撃をする筈はないと思ふことである。或は又道元禪師は後論する如き、不完全なる写本又は初刊年譜によつて、この攻撃文を書かれたものではないかとも考えた。然しそれが仮りに不完全なものなりとしても、円悟と大慧との關係は明かに書いてあると思は

れるので、そのためではないと考えられる。然らば自証三昧の章は、何としても道元禪師の黒星と断ぜざるを得ない。

茲に別の観点から考えられることが一つある。それは道元禪師入宋の当時は、彼の地に於て臨濟曹洞間に、宗派の抗争が深刻で、場合によっては同宗派間に於ても、かかる対立抗争の悪風が瀰漫しており、醜態を極めていたようである。そして大慧派下などはこの中心を成していたらしいのである。それ故に曹洞宗系の洞山微和尚に對しては、理由なき悪感情があつたように思われる。それで臨濟系の湛堂和尚に對するよりも風当りが強かつたかと考えられる。道元禪師も彼の地に於ける時流中に生活したので、自然これに捲き込まれた結果、大慧攻撃にも微和尚などのことを問題にしたものではなからうか。例を以て言えば大東亞戦争前の文章は、鬼畜米英と言わねば國賊視せられたのであるが、戦後より見れば隔世の観があるという類ではなからうか。斯かることは、何れも禪の本質とは無関係なる枝葉末節なることに拘わらず、恰かも禪の本質なる如くに誤認し、蝸牛角上に争うは、一種の猿芝居に過ぎない。しかもそれが尾を曳いて今日に及び、禪宗思想を歪曲せしめているのは、遺憾なことで、沙汰の限りと言つてよい。今日は進歩したる禪

宗史観に立つて、かかる思想を打破して、真禪に帰せしめねばならない。

猶ここに不可解なることは、道元禪師は大慧を眼中になく、殆ど認めぬ如くに見ゆるに、何故かくも大慧を問題にして攻撃するのであるうかということである。即ち、元來問題にならぬ大慧を、何故に自証三昧の章の大半を大慧のために費すのか理解に苦しむということである。

更に理解に苦しむことは、道元禪師はかく大慧攻撃をしているに拘わらず、正法眼藏隨聞記第五に於て、二個所も大慧禪師を禪徒の模範的人として扱っていることである。これはどうしたことであろうか。その一は、大慧禪師が或る時に臀部に腫れ物が出来たが、それでも坐禪をしたという話。他の一つは、或る時大慧禪師が、会下の者に對して訓ゆるに、人が借金で窮する時に、何とかしてこれを返済しようと日夕工夫をするように、参究したといった語があるが、道元禪師はこれを引用していることである。斯かる話ならば大慧ならずとも、他者に於て範を取り得ることは、禪門内に於て乏しくはない筈である。然るに糞味噌に攻撃している大慧を、模範の人として取り入れたことは、一貫せぬ態度で、実に狐にままれたやうで、何が何やら解らぬことである。

元來道元禪師の大慧攻撃は、大慧年譜によると思われるが、この年譜は如何にして成立したものなるかを明らかにせねばならぬ。大慧年譜一卷は、張倫の書いた序文によると、祖詠が南宋孝淳帝瀛癸卯十三年（一一八六）に編纂したものである。これは大慧寂後約二十年を経た時である。

而してその跋文は、大慧の門人たる華藏比丘、円覚宗演が書いている。これは更に十八年後の南宋寧宗開禧元年（一二〇五）である。華藏宗演は篤学の人で、臨濟録の刊行及びその他の禅籍を刊行した人で、大慧のその他の著書もこの人によりて刊行されている。華藏宗演の跋文によると、初刊の年譜には重大なる錯誤が甚だ多い。それでは非常に遺憾としていた折柄、矢張り大慧下の法友たる江西の瑩雲臥から、細々と年譜の誤りを指摘してよこした。今年は幸に余暇があつたので、それを本として校訂をしたが、六十余个所に及んだ。これで大体整備されたと思うと言っている。この瑩雲臥という人は、文筆に堪能として有名なる仲温暁坐で、雲臥紀談及び羅湖野録の著者である。この人の言は大慧が衡梅に流居中左右に待して、親しく見聞したことに基づくものであり、また自分の見聞とも符契するので、これで間違いなからんと、改訂の次第を記しているのである。

而して更に降ること、四十八年後の南宋理宗宝祐元年（一二五三）に、天台比丘徳濬という人が、この年譜を重刊しているのである。この年は我国の後深草天皇建長五年で、道元禪師示寂の年であるから、禪師はこの書を見る筈はない。禪師の大慧攻撃は、大慧年譜によるものとしたが、宗演の改訂版によって攻撃したとすれば、無着道忠和尚の言うことに道理があり、道元禪師に悪意があつたといつても、弁解の余地はない。道忠和尚自身は、改訂版の年譜によつてゐることは、言うまでもない。

私の論文は、道元禪師が大慧年譜を基として攻撃したものとて書いたのであるが、仮令年譜によらずして書かれたとしても、論断の結果に於ては、何等変更はない。それは大慧の卅七歳までのことは、年譜によつて明らかであるからである。

猶お大明高僧伝に天台沙門景元の伝があるが、その系語の中に大慧禪師のことが左の如く記されている。

大慧は既に雲峰悦の再来なりと。謂つべし大根器を具する者と。尚ほ湛堂の痛拶を受けて入らず、三十余にして方きに円悟の鉗鎚に触れ、始めて大悟を得と。これによるも大慧の人物は、道元禪師の非難するが如きにあらず。又大成は円悟の室に入って以後なることは、此処にも証明されている。道元禪師の所言とは相反する

のである。雲峰悦とは雲峰文悦禪師のことで、大愚守芝に嗣ぎ、大愚守芝は実に汾陽善昭に嗣ぎ慈明楚円とは法兄弟である。

以上いろいろ述べたが、これを以て道元禪師の所論の誤りなることを明かにしたと思われる。この論文はそのためのものであつて、正法眼蔵の全面否認論でない。又道元禪師を軽侮するためのものではないことはいうまでもない。飽くまで理論の上に立って真禪を高揚せんとするに外ならない。私はもとより道元禪師を讃仰する一人である。(この論文は拙稿真禪論の一章です)